

普濟寺 六面石幢

立川市唯一の国宝！

JR 立川駅から南へ進み、多摩モノレール柴崎体育館駅からおよそ700m 西へ進んだ柴崎四丁目に普濟寺はあります。

普濟寺は南北朝時代、文和2年（1353）、鎌倉建長寺の物外可什を招いて創建されました。そして延文6年（1361）、立川市の唯一の国宝、六面石幢は作られました。

六面石幢ってどんなもの？

六面石幢は、高さ166cm、幅42cm、厚さ9cmの緑泥片岩（秩父青石）6枚を六角形の台座の上に組み立て、その上に六角形の笠石と宝珠が載せられています。6面のうち2面には仁王像（阿金剛、吽金剛）、4面には四天王像（增長天、広目天、多聞天、持國天）が刻まれています。

石幢とは？

石幢とは石で造られた幢（仏や菩薩を装飾する莊嚴具のひとつ。旗、のぼり）のことです。幢は主に布で作られますが、宝珠できらびやかに飾られたものや、木の板で作られたものもあります。中国から伝来した様式のもので、唐の時代から作られるようになったそうです。

特徴は？

板碑（石でできた卒塔婆）と似ていますが、板が六角形に組み立てられている点と、その板に図像が刻まれている点においてとても珍しく、大正2年（1913）に国宝（旧国宝）に、文化財保護法施行後の昭和28年（1953）に改めて歴史資料として国宝に指定されました。

緑泥片岩は板状に加工しやすいため、ここ立川の地でも縄文時代から多く利用されてきました。石の産地である北武藏（現在の埼玉県長瀬町・小川町など）との交流もうかがえます。

緑泥片岩でできた石幢は埼玉県で数点確認されていますが、形が崩れずにきれいに残っている例は珍しく、加えて、図像が刻まれているものは普濟寺の六面石幢のみです。



国宝である六面石幢は保護の観点から直接接触する調査が大変難しいため、今回は写真を利用した非接触型の三次元計測をおこないました。その結果肉眼で見るよりも詳細で、より安全な観察が可能になりました。

次のページから、三次元計測の説明とそこから見えてきた石幢の姿を解説していきます。実際に実物を見る前に、六面石幢への理解がより深いものになれば幸いです。

